

2018年8月26日(日)／説教者：内間清晴

説教：「隣人を自分のように愛しなさい～宗教家とサマリア人～」

聖書：ルカによる福音書10:25～37

「善きサマリア人」は大変有名な話です。エルサレムからエリコに向かうと砂漠地帯に至ります。その中にあるオアシスがエリコです。登場するサマリア人は、北のガリラヤ地方と南のユダヤ地方の中間に位置する地域に住む人です。紀元前8世紀ごろ、この地方に外国人が移住し、宗教生活や社会生活が著しく異教化しました。さらに紀元前4世紀末には、マケドニア人の移住もあり、イスラエルの民がバビロニアでの捕囚から帰還した後は、エルサレムを中心とした信仰の純粋性を主張していたユダヤ人と対立していた。ユダヤ人は移動するとき、遠回りしてでもサマリア地方を避けて通っていた。イエスを試そうとして質問した律法の専門家たちには、イエスの例え話は受け入れられないことであつたでしょう。

律法学者の質問に対してイエスは、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい。」すると、律法学者は「私の隣人とは誰ですか。」と質問をしました。律法学者にとって隣人とは、律法を守る人、教養のある人、ファリサイ派の人、指導的な立場の人等であつたのではないのでしょうか。

当時、公に罪人とみなされていた人は、徴税人、犯罪人、律法を守らない人、サマリア人でした。つまり、彼らの隣人とは、彼らの価値観によって決められていた特定の人々であつた。

このサマリア人は、追い剥ぎに襲われて人を見て哀れに思い、近寄って、手当をし、宿屋まで連れて行き、その費用まで払う行為をしました。通り過ぎた宗教家である祭祀やレビ人も心では同情していたかもしれないが、通り過ぎて行った。つまり、係わりを持つことを選ばなかった。その宗教家たちには愛はあつたとは言えないでしょう。しかし、サマリア人は、頭で良いことを考えているのではなく、愛を行動によって示しました。

(ロバから降りて)近寄る、その行為が私たちにも求められているのではないのでしょうか。
(内間清晴)